

## シリーズ 「補綴装置および歯の延命のために」 Part 6 力のコントロール

市川哲雄

### Force and loading control in stomatognathic system

Tetsuo Ichikawa, DDS, PhD

本誌6巻1号から始まったシリーズ「補綴装置および歯の延命のために」は、歯根破折に始まり、外傷、根尖部病変、歯周疾患、口腔内環境劣化と続き、今回6回目をもって終了となる。

予後を左右する因子を突き詰めていくと、力の制御と感染の制御の2つの問題に帰着されるであろう。この問題を比べる場合、卵が先か鶏が先かの問題にもなるが、実際は相互に影響しあい、補綴装置および歯の経過に大きく影響を与えている。

感染の問題はどちらかという急性的な問題であり、その影響あるいは歯科的な対応の効果を評価しやすい。つまりエビデンスが得やすい問題である。一方、力の問題、つまり咬合力をはじめとする顎口腔系における力学的刺激が、補綴装置および力にどのように影響を与えるかについては、長い経過を経て表面に表れるものが多い。従って、評価法も定まっておらず、エビデンスが得られにくい側面を持っている。しかし、多くの臨床家は力の問題の重要性を十分に感じており、日々の臨床に向き合っている。そこで、5回目までは、歯科保存学あるいは口腔外科的な問題からのアプローチであったが、本シリーズの最終章は、最も歯科補綴学的な問題であるこの「力のコントロール」を取り上げ、整理することにした。

まず、森本達也先生に、『力の影響とされる補綴に関連する臨床実態』と題して、臨床医の立場から、力の

問題であると思われる症例を提示していただき、普段の臨床において力の問題にどのように向き合い、対応しているか、あるいは疑問を持っているかについて紹介いただいた。

次に、皆木省吾先生に、『顎口腔系に発現する力の様相とその負荷』と題して、加圧側の問題に対して、従来は夜間ブラキシズムが注目されてきたが、最近の高精度筋電計を用いた終日筋電図の記録からわかってきた覚醒時筋活動の最新の知見を含めて、顎口腔系への力の影響を考察していただいた。

服部佳功先生には、『顎口腔の力はコントロールできるだろうか?』と題して、力のコントロールは実際の程度まで可能か、またどのような対応が有効なのかについて、力の源である筋活動と、それが歯の咬合力と顎関節の負荷に配分される様式に焦点を当てて、冷徹な視点で吟味いただいた。

そして市川は、機能を発揮する咬合面を支持、維持する歯、粘膜、インプラントなど受圧側の要素について、とくに負担能力の観点と受圧側で考慮すべき問題について臨床的な視点で考察を行った。

本企画によって、力をコントロールすることは補綴歯科治療の重要な目標であり、補綴装置および歯の延命に対して必要な対応であるという認識が深まり、今後科学的根拠に基づく対応方法の確立が進むことになれば幸いである。

#### 題名および執筆者

「力の影響とされる補綴に関連する臨床実態」

「顎口腔系に発現する力の様相とその負荷」

「補綴装置や歯の延命に向けて、顎口腔の力はコントロールできるだろうか?」

「力を受ける生体側の観点から」

東海支部 森本達也先生

岡山大学 皆木省吾先生

東北大学 服部佳功先生

徳島大学 市川哲雄先生